

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：37103

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730465

研究課題名（和文） 幼児期の対人場面における否定的情動認知と情動制御発達の横断的・縦断的検討

研究課題名（英文） The cross-sectional and longitudinal study of the development of young children's cognition of negative emotion and emotion regulation in interpersonal scene

研究代表者 鹿島 なつめ（KASHIMA NATSUME）

九州女子大学・人間科学部・講師

研究者番号：80442408

研究成果の概要（和文）： 幼児期の否定的情動制御発達について、幼児へのインタビューと養育者、園への質問紙調査により3年間にわたって縦断的に検討した。現時点までの成果として、否定的情動喚起状況を不快として反応する傾向には一貫した個人差が予想された。しかし感情の言語化が進んだ例では、攻撃等の外向的問題行動が低下していた。4歳以降の否定的情動に対する養育者の情動焦点的反応は、子どもの攻撃的行動と相関が見られた。今後因果関係を検討する。

研究成果の概要（英文）： As the development of young children's cognition of negative emotion and emotion regulation, interviews to young children about negative emotion and the question paper investigations to fosterers and nursery schools was carried out over three years. The individual difference and the tendency to react as unpleasant to the negative emotion evocation situation were cohered for a period between two points. However, extravert difficult behavior, such as an attack, was falling in the example which verbalization of negative emotion followed. The fosterer's emotion focused reaction to the negative emotion after 4 years old correlate aggressive behavior of the child. Causal relationship will be examined.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文社会系 社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：(G)セルフ・コントロール

## 1. 研究開始当初の背景

人間が社会の中でよりよく適応していくためには、様々に喚起される自分の情動を調整し、文脈

や関係に適した形で主張や抑制を含めて表現する能力が必要となる。この働きを情動制御(emotion regulation)と言う。

臨床的視点からの先行研究 (e.g. Shirk, 1988) は、攻撃性の高い子どもについて攻撃行動を他者の自身に対する行動に帰しやすく自分の怒りの感情を認められない傾向を報告している。また抑うつ症状のある子どもについても情動の情報をより否定的に捉える傾向が先行研究から報告されている。攻撃行動も抑うつも情動制御の失敗と考えられるが、先行研究からは先行する情動の認知にも何らかの失敗が考えられ、情動制御発達と情動の認知の関連についてより明らかにする必要がある。

鹿島 (2000) は否定的情動の中で不安を取り上げ、幼児期の不安感情への認知と対処方略の発達的变化を調べ、3 ~ 6 歳にかけて図版に描かれた不安状況場面への不安感情の認知が上がり、不安状況場面への対処方略が回答できるようになることを報告している。

また、この研究で対人場面が描かれた全 5 場面の不安状況図版への対処方略を得点化したところ、3 歳児クラス - 4 歳児クラス間、4 歳児クラス - 5 歳児クラス間のそれぞれで有意な平均値の差が見られた (全て年齢が上であるほど有効と思われる対処方略を回答した)。このパターンを示すのは対人場面が描かれた場面のみであり、対人場面での否定的情動への情動制御の発達が幼児期の一時点で急速に獲得されるものではないことが示された。他の非対人場面の図版ではより早期に対処方略回答が可能になるために、この対人場面での加齢による段階的な対処方略獲得は年少の子どもの言語能力の限界のために差ができていないと考えられた。

つまり対人場面で喚起される否定的情動への情動制御は、非対人場面と比較するとかなり時間をかけて形成されていると考えられた。この結果より、本研究では対人場面で生じる否定的情動についての認知と情動制御の関連と発達について調べることとする。

また本研究は個人内要因の縦断的变化についての検討も目的とし、年長時に情動制御に問題が生じる子どもが、年少時からどのような情動の理解と制御の発達を示すかを縦断的調査より明らかにすることがもう一つの目的である。

## 2. 研究の目的

本研究は、幼児期の対人場面で喚起される否定的情動 (例えば不安・怒り) に対する認知と情動制御の発達を、3 歳時から就学にかけて横断的調査と縦断的調査を併用して考察することを目的とする。

また本研究では情動認知と情動制御発達の様相と日常生活での行動調査 (Child Behavior Checklist : CBCL) との関連、先行研究より導き出された関連要因との検討の検討までを行いたいと考える。

## 3. 研究の方法

本研究では被験者への言語を用いた調査が可能となる 3 歳以降の幼児期を対象とする。情動制御を調査するための図版の予備調査を経た後、以下の調査を各被験者について年 1 回縦断的に行なう。

### (1) 情動制御図版による面接調査

(年少・年中・年長の 3 学年に個別面接調査を行う)

### (2) 園・保護者への Child Behavior Checklist (CBCL) の実施

### (3) 保護者のしつけ方略・子どもの否定的情動への対処方略調査 (COPING WITH CHILDREN'S NEGATIVE EMOTIONS SCALE : CCNES) (Fabes et al, 1990) の実施

### (4) 保育園での問題行動調査「幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度」(金山ら, 2006)

## 4. 研究成果

2011 年度末に (1) ~ (4) の 3 年にわたるデータ収集を終了し、分析を継続している。

2011 年度の (1) 個別面接調査による言語データの分析が終了していないため、今回は主に (2) (3) のデータによる現時点での成果と、言語データ分析に関するパイロットスタディの成果について記述する。

2009 年度に 3 - 4 歳児であった被験児およそ 100 名について、2009、2010、2011 年度における養育者の子どもの否定的情動への対処方略調査 (CCNES) と子どもの問題行動調査 (CBCL) の相関を検討したところ、養育者の子どもの否定的情動への対処方略と子どもの問題行動には 3 歳の時点より関連が見られた。

2009 年度調査では、子どもの否定的情動に対する、養育者の懲罰的反応 (Punitive Reactions : PR) と子どもの問題や反応に対して養育者が取り合わない反応 (Minimization Reactions : MR) に、

弱い相関が見られた (PR- 非行的行動《 $r=.262, p<.01$ 》, PR - 攻撃的行動《 $r=.260, p<.01$ 》, MR - 不安抑うつ《 $r=.234, p<.05$ 》, MR - 思考の問題《 $r=.238, p<.05$ 》, MR - 非行的行動《 $r=.279, p<.01$ 》, MR - 攻撃的行動《 $r=.260, p<.01$ 》 内向尺度、外向尺度、総得点との相関の記載は重複のため本結果では省略)。

2010年度調査では、子どもの否定的情動に対する、養育者の情動焦点的反応 (Emotions-Focused Reactions : EFR) に子どもの攻撃的反応との相関 ( $r=.350, p<.01$ ) が見られた。

2011年度調査では、養育者の懲罰的反応(PR)、取り合わない反応(MR)、情動焦点的反応(EFR)と子どもの反応に対して養育者が苦痛を示す反応 (Distress Reaction : DR) と、複数の子どもの問題行動との相関が見られた (PR- ひきこもり《 $r=.339, p<.01$ 》, PR - 不安抑うつ《 $r=.233, p<.05$ 》, PR- 社会性の問題《 $r=.247, p<.05$ 》, PR - 思考の問題《 $r=.229, p<.05$ 》, PR- 非行的行動《 $r=.289, p<.01$ 》, PR - 攻撃的行動《 $r=.272, p<.01$ 》, PR - その他の問題《 $r=.254, p<.05$ 》, MR - 社会性の問題《 $r=.203, p<.05$ 》, MR - 非行的行動《 $r=.201, p<.05$ 》, EFR - 攻撃的行動《 $r=.235, p<.05$ 》, DR - ひきこもり《 $r=.215, p<.05$ 》, DR - 不安抑うつ《 $r=.269, p<.01$ 》, DR - 攻撃的行動《 $r=.272, p<.01$ 》, DR - その他の問題《 $r=.217, p<.05$ 》)。

単年度での相関の横断的検討であるため、養育者の子どもの否定的情動への反応の影響について、縦断的検討を今後行い発表する予定である。しかし、Fabes ら(1990)の報告と異なり、興味深い点として、4 - 5 歳児 (2010年度) 時点より子どもの攻撃的行動と養育者の情動焦点的反応に相関が見られることが挙げられる。

従来、子どもの否定的情動への養育者の懲罰的反応 (Punitive Reactions : PR) や子どもの問題や反応に対して養育者が取り合わない反応 (Minimization Reactions : MR) 子どもの否定的情動反応に対して養育者が苦痛を示す反応 (Distress Reaction : DR) について、子ども自身の coping への否定的影響が示されてきた。しかし、本研究では、積極的な方略として採用されてきた養育者の情動焦点的反応 (EFR) と子どもの攻撃的行動との相関が2カ年にわたって見られた。

養育者の情動焦点的反応 (EFR) とは、否定的情動を経験している子どもがよい気持ちとなるよう働きかける方略を指す。例えば自転車を倒して壊してしまい、混乱している子どもに対して、「なくさめ、アクシデントについて忘れようさせろ」というように、否定的情動を経験している子どもの情動に養育者が介入する反応である。

EFR は従来子どもを支援する方略とされてきたが、自律的対処が可能となる発達段階では、子どもが否定的情動に対処する機会を減じているとも

考えられる。一方で、子どもが4 - 5 歳児以降となっても否定的情動に対処することが困難であるために、養育者が介入せざるを得ない、ということも反映しているという推測も考えられる。

今後言語データを含めた全データの縦断的検討を進めるとともに、こうした相関関係の因果関係を明確に示したいと考える。

本研究の主データである情動制御図版に対する言語データについては、被験児在籍保育園のご協力の元、約100名の被験児について3年分の個別面接データを収集し終えている。

パイロットスタディとして、4 - 5 歳児から5 - 6 歳児にかけての二時点の言語データ9例について学会発表している (鹿島, 2011)。二時点で回答された否定的情動への言語内容を「不快」「否定的情動の命名」「快感情」「回答なし」のカテゴリーに分類し、検討したところ、否定的情動喚起場面に對する反応は、5歳時6歳時で一致する傾向が見られた。つまり、場面を不快として反応、快感情を表明する反応は二時点で類似していた。ここから否定的情動に対する反応の個人差はある程度一貫したものであることが考えられた。

上記のような反応の個人差が見られる一方、否定的情動の命名が5歳時から6歳時で上昇した3例では外向的問題行動の得点が低下していた。また、5歳時から6歳時で減少した1例では外向的問題行動の得点は上昇していた。

以上より不安状況を不快として反応する傾向には一貫した個人差が考えられる。しかし二時点で感情の言語化が進んだ例では、攻撃等の外向的問題行動が低下していた。言語データ約100例について、以上の点を検討していきたい。

また本研究は新規課題 (若手研究B「前思春期の適応への幼児期の情動制御発達の影響」課題番号: 24730612) により、前思春期 (10歳前後) までの縦断調査を継続する。本研究の被験児・養育者83例が継続して調査に協力予定であり、幼児期から前思春期にかけてのデータを検討していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

鹿島なつめ、3歳児の否定的感情の認知、言語化と情動制御の関連、日本教育心理学会第51回(静岡大学)総会発表論文集、586 (2009)

鹿島なつめ、幼児期の否定的情動に関する言語内容の縦断的検討、日本教育心理学会第53回(北海道学校心理士会・北翔大学)発表論文集 (2011)

〔図書〕(計0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

鹿島なつめ

(KASHIMA NATSUME)

九州女子大学・人間科学部・講師

研究者番号: 80442408

### (2)研究分担者

( )

研究者番号:

### (3)連携研究者

( )

研究者番号: